



〈研究〉經濟學ノ發端 Richard Cantillon. (2)

福田, 敬太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 29(5):747-759

(Issue Date)

1920-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053254>



經濟學ノ發端 Richard Cantillon. (其二)

神戸高等商業學校講師

商學士 福田 敬太郎

Cantillon ノ貴重ナル文獻ハ三部カラ成立シテ居テ、第一部ハ更ニ十七章ニ分レ、經濟學ノ序論ノヤウナ形ヲ成シテ居ル。即チ富ノ定義カラ始メ、人類社會生活ノ起源カラ説キ、村落、都市、首府ヲ論ジ、勞働ト賃銀ノ關係、勞働ト土地トノ關係、社會各階級ガ地主ニ依屬スル事實、其ノ他、價值論、人口論、金銀論ニ及ンデ居ル。

第二部ハ全十章カラ出來テ居テ、物々交換・價格・貨幣流通・利子等ノ問題ヲ取扱ツテ居ル。Je vous へ、通貨ニ關スル纏ツタ所説ガ出版セラレテ以來コレホドノ分量ノモノデコレダケ完全ニ説キ盡サレタモノハ無イ、ト賞讃シテ居ル。

第三部ハ外國貿易・外國爲替・銀行・信用等ノ諸問題ニ觸レテ居ルトコロノ八章カラ成リ立ツテ居ル。此ノ部ハ當時ノ狀態ト知識トカラ判斷スルト特ニ感服セネバナラスモノデアル。第三部ヲ讀ム者ハ Cantillon ガ當時ノ片々タル論説家ガ解決シ得サカツタ多クノ問題ヲ美事ニ片付ケテ居ル、コトヲ知ルデアラウ。

Cantillon ノ Essai ハ以上三部カラ組立テラレテ居ルガ、其ノ結構カラ云ヘバ、決シテ Hume ノ

Political Discourses, 1752. ト同日ノ談デハナイ。Humeノ論說集ハ字義通リニ雜多ナル議論ノ寄せ集メデアルガ、Cantillonノ論文ハ終始一貫シタルモノデアル。租稅論ニコソ觸レテ居ナイガ、經濟學ノ全分野ニ亘ツタ思索的體系デアル。

サレバコン Jevons モ此レヲ以テ the first treatise of economics デアルト認メタノデアル。尤モ既ニ第十七世紀ノ中葉ニ Sir William Petty ガ Political Arithmetic, 1676. ヲ Treatise of Taxes and Contributions 1662 等ヲ出シテ居ル。經濟學說史ノ研究上、英國政治派ノ功績ヲ無視スルコトハ出來ナイ。Pettyノ此等ノ文献ハ確カニ當時此ノ方面ニ於ケル驚クベキ產物デアル。ケレドモ其處ニハ何等ノ統一ナク、唯ニ時々ノ思ヒ付キヲ事實ノ間ニ間ニ書キ込ンダニ他ナラス。尙ホ Petty 以後英國ニハ多クノ經濟的文献ガ現ハレタ。Vaughan, Locke, Child, Mun 等。然シ此等ハ皆齊シク斷片的ノ評論ヲ行ツタ人々デアル。故ニ茲ニ Burton ノ Hume ニ與ヘタ言葉ヲ Cantillon ニ譲ツテ Cantillon ノ Essai コソ眞ニ Cradle of Political Economy デアルト言フコトハ必ズシモ不當デハナイ。

然ラバ我々ハ次ニ其ノ内容ヲ稍々詳細ニ窺ヒ愈々我ガ Cantillon ヲ仰グ念ヲ深カラシメヤウ。

第一部第一章ノ開言ガ特ニ我々ノ眼ニ付ク。譯シテ曰ク、「土地ハ富ヲ獲ル源泉若クハ原料デアル人間ノ勞働ハ富ヲ造ル様式 forme デアル。而シテ富ハ生活ノ維持・便宜・快適ノ爲メノ財ニ他ナラス」(p.1) (註)

(註) 予ノ引用スル Essai ハ Harvard 大學ニテ翻刻シ、一八九二年 Macmillan ノ出版ニカ、ルモノ、東京商科大學圖書館

此ノ一句ハ經濟學說ノ發展ヲ顧ミル者ガ齊シク興味ヲ感ズルモノデアル。茲ニ原始的ナル生産要素ノ觀念ト素朴ナル所得觀念ガ現ハレテ居ル。土地ト勞働トヲ生産要素トシテ數ヘ舉ゲタ人デ英國ニ於ケル最初ノ人ハ Petty デアラウ。彼ハ Treatise of Taxes and Contributions. 第十章第十款 (Hall 教授ノ編纂シタ Petty) ニ於テ、「勞働ハ富ノ父ニシテ能働の本原ナリ。而シテ土地ハ其ノ母ナリ。」
(經濟論集第一卷六八頁)
ト説破シテ居ル。Cantillon ハ此ノ思想ヲ以テ彼ノ經濟學ノ出發點トシタ。Smith モ亦屢々「一國ノ土地ト勞働」ト云フコトヲ繰返シタ。然ルニ Cantillon ノ此ノ立言ニ於テハ、土地ト勞働トニ同等ノ重味ヲ持タセテ居ルノデアルガ、後ノ經濟學者ノ議論ニ成ルト何レカ一方ニ偏シテ居ルコトニ注意セチバナラヌ。例ヘバ Quesnay ハ土地ニ偏シテ、土地ニノミ純生産ヲ求メ、Smith ハ勞働ニ偏シテ、各國ノ毎年ノ勞働ヲ以テ一國民ノ生活必需品ト便宜品トヲ供給スル資源デアルト考ヘタ。
Cantillon ハ、人間ノ生活ト土地トノ密接ナル關係ヲ研究シタ(第二章乃至第六章參照)我々ハ Stewart ノ「經濟學原理研究」ヲ讀ンデモ其ノ第一篇ノ首メニ農業論ト人口論トヲ合セ行ツテ居ルコトヲ見ルノデアルガ、Cantillon モ亦經濟學ノ振リ出シニ人間ト土地即チ人口ト農業ノ關係ヲ説ク。而シテ簡ニシテ要ヲ得タル點ニ於テ後者ハ遙カニ前者ニ卓レテ居ル。又既ニ職業的階級ノ分歧ニ注目シ、農民ト工民トノ分業ニ因ル村落繁榮ノ次第ヲ掲ゲテ居ル (C. H. O.) 更ニ市場發生ノ道行ヲ説明シ、都市ノ成立ハ大地主階級ガ文化的生活ヲ營ム爲ニ出來上リタルモノナルコトヲ説キ、ソコニ商工業ノ盛ンナルコト、外國人トノ取引サヘモ行ハル、コトヲ述べ、結局、人類ノ生活ガ繁榮スル原因ハ、常ニ、

土地ノ果實ト其ノ土地ノ上ニ働ク人口トニ比例スルコトヲ力説セントシタ。 Physiocrats ノ徒ガ此ノ學說ヲ歡迎シタコトハ怪シムベキデハナイ。 Mirabeau ハ Quesnay ニ由ツテ、「人口ガ富ノ原因デナク、富ガ人口ノ源泉デアル。」ト説カレテ直チニ Quesnay 崇拜者ト成ツタト云フガ、若シ彼ガ此ノ Cantillon ノ言葉(p.p. 15; 16)ヲヨク味ハツタナラバ必ズシモ俄カニ Quesnay ニ從フ必要モナカツタデアラウ。

農業勞働ハ職人勞働ヨリモ廉ク買ハレルコト、職人勞働モ時ト場合ニ由リ賃銀ガ一定シナイコト(第七章)ニ就テ説カシテ居ルトコロヲ讀ンデ、我々ハ茲ニ「國富論」第十章ノ初メノ方ニ出テ居ル各種職業ノ賃銀ニ關スル Smith ノ意見ガ既ニ Cantillon ニ由ツテ豫メ告ゲラレテ居ルコトヲ見ル。 Smith ハ職業ノ差異ニ由ツテ賃銀ノ高ニ大小ガアル原因ヲ五ツ擧ゲテ居ル。

- (一) 仕事ノ難易・清潔不潔・尊卑ニ由ルコト。
- (二) 仕事習得ノ難易ト其ノ費用ノ多寡ニ由ルコト。
- (三) 仕事ノ永續性カ一時性カニ由ルコト。
- (四) 仕事ヲ爲ル人ニ置カレル信任ノ程度ニ由ルコト。
- (五) 仕事ニ成功スル確シサニ由ルコト。

Cantillon ハ右ノ中、(一)(二)及ビ(四)ノ項目ヲ説イタ(p.p. 24; 26; 27.)

「農夫・職人其ノ他一國內ニ働ク人々ノ數ハ自然的ニ需要ニ應ズルモノナリ」トノ標題(第九章)ヲ掲ゲテ説クトコロハ恰モ Ricardo ノ祖述者ノ觀ガアル。勞働者ノ人口ハ職業ノ數ニ比例スルモノ

ナルコト、換言スレバ一國ノ勞働者包擁力ハ職業ノ大イサヲ測ルコトガ出來ルコト、從ソテ慈善學校 Ecoles de Charité ノ如キ方法デ勞働者ノ人口ヲ増加シヤウトスル企テハ徒事ナルコトデアルト云ツテ居ル。茲ニ我々ハ、人口ヲ制限スルハ Employment ナリ國富ナリ、苟クモ Employment ガ存スル限り人口ハ増加スト信ジテ立チタル Young ヲ思ヒ出スノデアル (Political Arithmetic, 1774, p. 61 ff.) 慈善學校、貧民救助、其レハ誠ニ結構デアアル。然シ其レハ消極的ニシテ無益ナル愚策デアアル。勞働者ノ増加ヲ圖ラントスルナラバ、須ク職業ヲ増加シ、勞働ノ需要ヲ大ニスベシト云フノガ Cantilion ノ心デアル (福田博士「英佛兩國大小農制ニ關スル」アルサー・ヤングノ研究ニ參照)。

次ニ讀ムベキモノハ Cantilion ノ價值論デアアル (第十章)。數十頁ヲ費シテモ尙ホ論ジ切レナイ大問題ヲ僅カ數頁ノ中ニ疊ミ込シテ實際ヲ賞讃スルヨリモ、我々ハ其レガ當時ノ價值論ノ代表的ノモノデアルトコロニ重キヲ置キタイ。Cantilion ニハ、價格ト價值トノ區別ガ明確デハナイ。彼ハ常ニ le prix et valeur intrinsèque ト言ヒ續ケル。然シ、此ノ内實價格及ビ内實價值ニ對シテ市場價格 le prix du Marché ノ觀念ガ樹立シタコトハ注目ニ價スル。「一般ニ物ノ内實價格及ビ内實價值ハ其ノ生産ニ要シタル土地並ニ勞働ノ尺度デアアル」。「土地生産物ノ分量及ビ勞働ノ分量並ニ性質ハ必ズ價格ニ含マレル」。「然シ屢々多クノ物ハ實際此ノ内實價值ヲ持ツテ居リ乍ラ其ノ價值ヲ以テ市場デ賣買セラレナイコトガアル。其レガ人々ノ流行ト好奇心ト消費トニ懸ルモノデアアル」。「物ノ内實價值ニハ決シテ變化ガナイ。ケレドモ財貨ノ生産ヲ一國ノ需要ニ適合セシムルコトガ出來ナイタメニ日々ノ變動ガ起リ、市場價格、ニハ不斷ノ進退張弛ガアル。ヨク整頓シタ社會デハ、消費ガ充分

恒、常、統、一、的、デ、ア、ル、ト、コ、ロ、ノ、財、貨、ノ、市、場、價、格、ハ、内、實、價、値、ヲ、隔、ル、コ、ト、遠、ク、ハ、ナ、イ、。

我々ハ茲ニ第十章カラ引用シタ若干ノ文句以外ニ出來ルナラバ尙ホ多クヲ傳ヘタイト思フ。何トナレバ今後我々ガ經濟學說發展ノ跡ヲ溫ネルニ當ツテ如何ニ屢々 Cantillon ノ思想、其ノ説明法、其ノ例示、其ノ言葉使ヒ其ノマ、サヘガ、殊ニ價值論ニ就テ、現ハレ來ルカラ知ルデアラウ故ニ。然シ今ハ唯々彼ガ市場價格決定ハ需要供給ノ法則ニ由ルモノデアルト斷定シタコト、市場價格ハ正當社會ニ於テハ内實價值ニ近クト豫想シタコトノ二ヲ特ニ注意スル。此ノ明快ナル價格論ハ Harris 及モ Stewart ニモ傳ハツテ居ル。此ノ點ヲ指シテ Jevons ハ、此ノ章ニ於テ Cantillon ハ Ricardo Mill 其ノ他ノ人々ガ忘レテ居タ大ナル問題ニ觸レテ居ルト云フ。而シテ其レハ今尙ホ未解決ノ問題曰ク「正常需要供給ノ均衡」!

Smith ハ餘リ他人ノ名ヲ擧ゲテ引用スルコトヲシナイ人デアルガ、Cantillon ハ唯一回彼ニ指名セラル、ノ光榮ヲ持ツタコトガアル(國富論「第一編第八章」)。而シテ其レハ不思議ニモ Cantillon ニ由ツテ引用セラレタル Petty ノ一節デアル。即チ第十一章ニ説クトコロノ「土地ノ價值ト勞働ノ價值トノ均衡又ハ關係」デアル。既ニ説イタ如ク、Petty ハ土地ト勞働トヲ以テ富ノ父母トシタノデアルガ、此ノ生産ノ二要素ノ何レカ一方ヲ以テ物ノ價值ヲ測ルコトガ便利デアル、其レニハ兩者ノ價值關係ヲ定メナケレバナラナイト思ツタ(Treatise of Taxes and Contributions. 1662. Ch. IV. §18. Hull's Ed. Vol. I. pp. 44/5)。シカシ Cantillon ハ此レヲ評シテ全ク通りガ、リノ思ヒ付キニ過ギナイトシ、自カラ其ノ根本的釋明ヲ企テタノデアル。

Cantillon ノ樹テタ土地ト勞働トノ價值方程式ハ、最下等ノ勞働ノ價值(1)ハ勞働者ノ生活維持

ニ必要ナル土地生産物(N)ノ價值ノ二倍ニ當ル、 $L = 2N$ ト云フノデアル。此ノ方程式ヲ説明シテ Cantillon ハ、先ヅ最下等ノ奴隸勞働者ヲ取り、彼ノ勞働ハ少クトモ彼ノ生計ヲ維持スルニ必要ナルモノヲ生産シ、更ニ子供ガ勞働年齡ニ達スルマデ養フモノヲ生産スベキデアルトシ、子供ハ十七歳マデニ半數ハ死ヌモノデアルトノ Halley 博士ノ計算ニ從ツテ、生活維持ニ必要ナル生産物ノ二倍ヲ生産セナケレバナラヌコト、シタ。即チ最下等ノ勞働モ生活維持ニ必要ナル土地面積ノ二倍ノ價值ガアルト結論シタ(p. 44)。更ニ Cantillon ハ其ノ兩者ヲ結合スルニ貨幣價值ヲ以テシタコトハ注目ニ價スル(p. 53, 4)。

Quesnay 初メ初期ノ佛蘭西經濟學者ガ Cantillon ニ多クヲ負ツテ居ルコトハ周知ノ事實デアルガ誠ニ第二十二章第十三章第十四章等ニハ Physiocrats ノ喜ビサウナ言葉ガ列ンデ居ル。例ヘバ第二章ノ標題、「一國ノ全階級全人民ハ地主階級ニ依屬シテ維持増加スル」ト云フコトノ如キハ Physiocrats ノ力説シテ止マナイトコロデアル。然シ Cantillon ハ決シテ Physiocrats 所謂不毛階級 classe stérile ヲ蔑視シナカツタ。勞働階級 Gens de Travail ガ貴族地主等ニ仕フルバカリデナク、彼等ガ相互ニ扶助スルコトニ由ツテ社會ノ進歩ヲ圖リ、直接間接地主階級ニ奉仕スルコトヲ説キ彼等ノ社會的存在ノ理由ヲ明カニシタ(p. 61)。是レ後ニ Smith ガ Physiocracy ニ反抗シテ力説シタ點ニ他ナラス。

驚クベキコトハ Cantillon ガ企業者ノ職能ヲ理解スルコト近代人ノ如キコトデアル。即チ第十三章ハ、タトヒ其ノ結論ノ前半ニ於テ地主階級以外ハ全部地主ニ依屬シテ生活スルモノナルコトヲ示

スモノデアツテモ、其ノ後半ニ於テ、企業者ガアツテコン財ノ流通交換ガ初メテ可能トナルコトヲ明カニスルモノデアル (p. 75)。此ノ點ハ、Queenay ノ「經濟表」ガ全然機械的ナル富ノ流通ヲ表示スルニ止マルニ反シテ、充分有意的ナル經濟生活ノ實相ヲ語ルモノデアリ、茲ニ我々ハ Smith ニ對スル John Rae ノ意義ヲサヘ豫感スルコトガ出來ルノデアル。Cantillon ガ、Jevons モ云ヘル如ク、Physiocrats ノ片手落ヲ避ケルコトガ出來タ他ノ一ツノ例證ハ、第十四章ニ於テ、地主階級ノ重要ヲ認ムルト共ニ其ノ眼界ハ決シテ農業ノ方面ニ限ラレズシテ、常ニ市場ノ方面、物價ノ變動ノ方面ニ向ケラレテ居ルコトニ現ハレテ居ル。

Physiocracy トノ關係ヲ考ヘルコトヲ終ルト、我々ハ直チニ Malthus トノ關係ヲ思ハセラルルトコロノ第十五章ニ移リ、Cantillon ノ人口論ヲ讀マネバナラス。Malthus ガ Cantillon ヲ讀ンダコトハ證明セラレテハ居ラナイケレドモ、Cantillon ハ既ニ Malthus ノ問題トスルトコロヲ暗示シタ。Cantillon ノ問題トスルトコロハ、貧乏ナル多數ノ人口ヲ求ムベキカ、將タ少數ナリトモ富裕ナル人口ヲ希フベキカト云フコトデアッタ (p. 113)。

動物ノ繁殖ハ食物ニ由ツテ制限セラレル。食物サヘアレバ無限ニ繁殖スル。人口モ亦然リデアノ (p. 110) Jevons ハ此ノ章ヲ賞讃シテ、是レ Malthus ノ有名ナル論文ヲ僅々二十七頁ニ縮メタモノデアルト云フ。ケレドモ予ハ、Cantillon ガ Malthus ト根本的ニ異ナルトコロハ、前者ハ後者ノ如ク人口増加ノ「道德的制限」ヲ説カズシテ、人口ノ増減ヲ土地分割ノ事實ニ掛ラシメタ點ニアルコトヲ注意シタイ。Cantillon ハ地主階級ノ生活狀態ノ如何ニ由ツテ人口ノ増減ガ定マルト考ヘタノデ

アル。彼ハ、一人ノ生活維持ニ必要ナル土地ノ面積ハ地味中等ノモノ一・五 arpent デアル (p. 93)。相當餘裕アル生活ヲスルニハ四乃至五 arpent ヲ必要トスル、ト考ヘタ。而シテ問題ハ一・五 arpent デ生活スル四百萬人ヲ求ムベキカ、若クハ六 arpent ノ土地ニ生活スル百萬人ヲ可トスルカニアル。蓋シ Cantillon ノ心ハ最近世ノ Hedonist ノ心ニ通スルモノガアルノテアルマイカ。

Cantillon ハ第十六章デ勞働ノ増加ト共ニ國富ノ増加スルコトヲ説キ、第十七章ニ入り金銀ノコトニ觸レテ、第一部ヲ閉ヂテ居ル。而シテ此ノ第十七章ハ第二部以下ノ流通論ヘノ橋渡シトシテ重要ナル一章デアル。即チ著者ハ茲ニ財ノ價值ヲ測定スベキ共通尺度ノ必要ナルコト、其ノ價值尺度ノ性質、其レニ適當ナル財ヲ列舉シテ居ル。而シテ其ノ結論ハ金銀論者ニ和シテ金銀ヲ以テ最良ノ價值尺度デアルトスル (p. 145) John Law ノ Mississippi 策ヲ笑ツタ Cantillon ハ同時ニ Law ノ貨幣論ニモ賛成シナイノデアル。然シ乍ラ次ノ言葉ヲ聽クトキニ我々ハ Ricardo トノ異同ヲ發見スル。

「金銀ハ、他ノ商品ヤ穀物ト同ジク、人が大體其レニ認ムルトコロノ價值ニ比例シテノミ、費用ヲ投ジテ生産セラルル。凡ソ人間ガ勞働ニ由リ生産スルトコロノ物ハ何レモ、其ノ勞働ガ彼等ノ所得トシテ備ヘルベキデアル」 (p. 149)

内實價值ハ土地ト勞働トカラ産マレルト説イタ Cantillon ガ、價值アルガ故ニ其ノ上ニ勞働ヲ費シテ財ヲ造ルトモ云フ。彼ノ價值觀ハ茲ニ至ツテ Malthus ニ非ズ、Ricardo ニ非ズ、費用價值カ利用價值カ、彼自ラ言ヲ左右ニシテ定マルトコロヲ知ラナイ。

次ニ第二部及ビ第三部ニ就テ概略ヲ紹介シテ置カウ。

Cantillon 〱 Locke 以降ノ英國著者ノ物價論、即チ物價ノ決定ハ財ノ多寡ト流通貨幣ノ多寡トニ比例スルモノデアルト云フ説明ヲ批評シ(第二部、第二章)、其ノ思想ノ正シイ適用ヲ求メテ市場價格ヲ解釋スル (p. 157) 而シテ市場相互間ノ影響ニ注目シ、佛國デ穀價ガ騰貴スレバ英國其ノ他デモ騰貴スルト云フ事實ヲ認メル (p. 159)

貨幣ノ流通ヲ論ズルニ當ツテ、先ヅ當時英國ニ行ハレテ居タ所得ノ三形式ヲ擧ゲル。一ハ地代、二ハ賃銀、三ハ利潤デアアル (p. 160) (註) 此等ノ所得ノ形式ニ由ツテ貨幣其ノ他ノ轉帳流通スル (p. 162, 3) Quesnay ノ「經濟表」ハ此ノ思想ヲ圖解シタモノデアアル。Cantillon ハ進ンデ斯クノ如クシテ一國內ニ流通スル貨幣ノ必要額ヲ計算シテ、年々ノ土地生産額ノ六分ノ一ニ相當ス金額ヲ標準トスル。ソノ理由ハ、總テノ支拂ガ年四回行ハレルモノトシテ、勞働者及ビ企業者ダケガ地主カラ支拂ヲ受ケルモノデアルカラ、一回ノ支拂ニ要スルモノハ全生産額ノ四分ノ一ノ三分ノ二即チ六分ノ一ト成ルト云フノデアアル (p. 169) 此ノ計算ヲ見テ我々ハ Petty ノ同様ノ試ミヲ想起スル。Cantillon 自ラモ Petty ヲ引用シ其レヲ批評シテ居ル (pp. 173, 4) Petty ハ一國ノ必要貨幣額ヲ年々ノ土地生産額ノ十分ノ一ト計上シタガ、Cantillon ハ其ノ根據頗ル薄弱デアアルコトヲ示シタ。

(註) 茲ニ所得ノ三形式ト云フハ、Cantillon ノ所謂 trois rentes ノ意ヲ汲メタデアアル。彼ハ地主ノ得ル所ノモノ rentes des propriétaires des terres 勞働者ノ得ル所ノモノ gages des domestiques et des ouvriers 企業者ノ得ル所ノモノ profits des manufacturiers, des fermiers, et des autres entrepreneurs ナ明確ニ區別シテ居ル。而シテ三者ヲ通シテ rente ト云フ言葉ヲ用ヒタトコロニ我々ノ興味ガ湧ク。

貨幣ノ流通必要額ヲ考ヘルニ當ツテ必ズ忘レテハナラナイコトハ流通速度ノ問題デアルガ、Cantillon ノ周到ナル注意ハ決シテ其レヲ見逃サナイ(第二部第四章)。又都鄙ノ間ニ物價ノ差異ノ存在スルコトニ就テ、Jevons モ褒メテ居ルホド明快ナル且ツ含蓄アル説明ヲ與ヘタ(同部第五章)。都市殊ニ首府ニ於テ物價が高イノハ、結局、其處ニ貨幣流通額が大デアルカラデアルト斷定スルコトガ Cantillon ノ主眼デアツテ、同様ノ説明ヲ對外關係ニモ適用シ、各國間ニ於ケル貨幣流通額ノ差異ガ常ニ各國間ノ物價上ノ差異ノ原因ト成リ、惹イテハ貿易均衡ヲ破ルニ至ルト説明スルノデアル(P. 209)。是レ Mercantilists ノ思想カラ Copercas 的轉回ヲ行ツタモノデ、Hume ニ(註) 將タ Ricardo ニ發展シ行クベキ貨幣水準説ノ萌芽デアル。

(註) Cantillon ト Hume ノ比較研究ハ重要ナコトデアル。殊ニ Hume ノ Political Discourses ニ現ハレテ居ル貨幣論(第三論文)ト Cantillon 貨幣論、又前者ノ貿易均衡論(第五論文)ト後者ノ第二部第七章ニ現ハレタル思想トノ比較ニハ教ヘラルルトコロが多い。

斯クシテ問題ハ貨幣ノ流通ト云フ興味深ク且ツ容易ニ釋明シ能ハザルモノニ觸レ、Cantillon ハ第六章第七章第八章ヲ通ジテ説述シテ居ル。而シテ讀者ハ茲ニ於テ彼ガ單ナル Physiocrats ノ先驅者タルニ止マラズ、Mercantilists トモ深イ交渉ヲ保ツテ居ルコトヲ知ルデアラウ。就中、第六章ニ於テ一國ニ於ケル金銀ノ増減ヲ説キ、金銀鑛ノ發見ガ物價及ビ賃銀ニ及ボシタ影響ヲ細敍シタコトハ誠ニ Jevons ノ驚嘆スル如ク、卓見デアツテ、是レ實ニ Stewart ガ Young ニ由ツテ叱正セラレタトコロ、Cantillon ノ面目モ亦全シト云フベキデアル。

第二部ヲ終ル前ニ我々ハ利子、問題ニ觸レネバナラス。勿論 Cantillon ノ利子論(第九章)ハ甚ダ幼稚デアル。然シ乍ラ *damnum emergens* トカ *lucrum Cessans* トカノ言葉ガ利子論ノ中カラ消エ去ラナイ時代デアルコトヲ思ハネバナラス。彼ノ論ズルモノハ金錢使用料デアル。金錢使用料タル利子ノ高低ハ、金銀存在量ノ多少ノミニ由ルモノデハナク、即チ貨幣ノ供給ノ側ノミカ決定セラル、ノデハナク、同時ニ其ノ需要ノ側モ一動力ヲ成スコトヲ説ク(p. 283)。

外國爲替ノ問題ニ就テハ Cantillon ノ論文(第三部)ホド精細緻密ニ取扱ツタ科學的ノモノハナカヲウト、Jevons ハ褒メテ居ル。又通貨ノ實際問題ニ就テモ立言シ、所謂 Bimetallism ノ論争ノ解決ニ寄與セントシタ(第四章)。即チ金銀比價ノ歴史の觀察カラ出發シ、Newton ガ當時ノ Guinea 貨ヲ二十一志ニ定メルコトヲ唱ヘタ動機ニ就テ面白イ解釋ヲ下シタ。Cantillon ノ主旨ハ貴金屬ノ法定價格ハ市場價格ト一致スベキデアルト云フニ存スル(pp. 731—)而シテ精練シタ論調ヲ以テ複本位制ニ反對シタ(pp. 380, 1) Cantillon ノ云フトコロハ後ニ一八一六年 Silverpool 郷(註)ノ勸告ニ由ツテ實施セラルルニ至ツタトコロノ幣制ノ根底ヲ成スモノデアル。

(註) Lord Siverpool, Charles Jenkins(1771—1808)ノ有名ナル建白書 A Treatise on the coins of the Realm,

1805 < George 三世ニ奉ル。本文ニ言フ Silverpool 郷ハ其ノ子 Second Earl, Robert Banks Jenkins(1777—1828)ニアル。コノ年一八一六年ニ An Act to provide for a New Silver Coinage, and to regulate the currency of the Gold and Silver coin of this Realm ト題スル案ヲ策シテ、金本位制ヲ採用シ、銀貨ヲ補助貨幣トシタ。

Cantillon ノ時代ニハ銀行業ガ餘リ發達シテ居ナカツタニ拘ラズ、彼ノ銀行論(第三部第六章)ハ完全ニ近イ。彼ハ既ニ所謂 *too par évalution* (p. 185)ニ注目シテ居ルガ、是レ後世學者ノ *cheque and*

clearing system (Jeavons, Money and the Mechanism of Exchange, ch. XX.) ノ一ニ數ヘルトコロノ帳簿上決濟ヲ行フ交互計算ノ

思想ニ他ナラス。銀行ノ職能ヲ述ベルニ當ツテ此ノ點ヲ遺憾ナク傳ヘテ居ル。又國立銀行ノ性質ヲ研究シ、紙幣發行ノ問題ニ觸レルヤ、嘗テ Law ノ紙幣ヲ種ニシテ數日ノ間ニ數百萬ノ財ヲ積ンダト傳ヘラレテ居ル彼ガ次ノ如キ警告ヲ我々ニ與ヘテ居ル。

「虚構的ニシテ假想的ナル貨幣豊富ナルコトハ、流通場裡ニ於テ眞實ナル増大ト同様ノ不利益ヲ生ズル。即チ地代、賃銀ヲ騰貴シ、其ノ結果、農業工業ヲシテ土地勞働ヲ失ハシムルニ至ル虞レガアル。然シ眼ニ見エナイ此ノ豊富ハ一朝ノ不信用ガ到來スレバ直チニ破壊シ、混亂ヲ惹起スルモノデアル。」 (p. 413)

蓋シ是レ Law ノ實驗ヲ目撃シタトコロカラ出タ彼ノ信仰デアラウ。Law ノ學說ヤ良シ、Law ノ實行ヤ早マレリト云フベク、其ノ禍ハ茲ニ Caution ヲシテ紙幣價值ニ思ヒヲ深メシメル餘地ヲ奪フニ至ツテ極レリト云フベキデアル。(一九二〇—八一二稿下)(六元)